

フランス発日本へ 一昭和30年代の到着便一

田畠 裕司

昨年、世界各国から日本への到着便の大ロットを入手する機会がありました。それらは、戦後の初日カバーが多かったのですが、それ以外に郵趣家便もかなり含まれていました。中でも目を引いたのは、フランスの切手商から日本の収集家への昭和30年代（1961-63）の一連のカバーで、新切手を発行したと思われる税関のラベル（郵便物の評価額を申告したもの）が貼付されていました。これらのカバーは、通関料徴取や税関検査印から通送ルートも解明できるので、平面便と航空便の郵便料金の変遷、特殊取扱（書留）などを示せば、面白いと作品に仕上がると思いましてみました。

さて、日本とフランスは、ユーラシア大陸の東西両端に位置し、約1万キロ離れています。両国間の郵便は、昭和30年代になると、約1か月かかった平面便（船便）から航空便に移行しつつある時期でした。そして、昭和36年（1961）から航空輸送は機材の大型化と高速化により大量航空輸送時代に入りました。

ところで、郵便史の作品として取りまとめるのに必要な基礎資料は、郵便料金表です。これも、フランス郵便史の専門家である松本純一氏の著作で、郵便料金表を掲載された文献名が分かったので、インターネットオークションのeBayでその文献が出品されるのを待ち続け、定価の数倍の価格でようやく入手することができました（表を参照）。特に、封書基本料金は20gごとに、航空料金は5gごとの料金に設定され、料金体系が異なり、様々な料金がみられるので興味深いものとなっています。なお、1960年には通貨が100分の1に切り下げされるデノミネーションが実施されています。

表 日本への郵便料金の変遷

	封書 0-20g / +20g		葉書	書留	航空便 5g毎
1951.5.1	30. F	18. F	18. F	45. F	45. F
1957.7.1	35. F	20. F	20. F	同上	同上
1958.5.10	同上	同上	同上	同上	50. F
1959.1.6	50. F	30. F	30. F	60. F	60. F
1960.1.1	.50F	.30F	.30F	.60F	.60F
1962.2.1	同上	同上	同上	.70F	同上
1964.5.19	同上	同上	同上	1. F	同上

I 封書基本料金30F時期

航空便・書留



LYON TERREAUX 1956.7.5+税關(DOUANE)ラベル→HAKATA1956.VII.9(裏面)
博多局「通関料48円」表示、博多税關支署免税印



椭型歐文印(ゴム)HAKATA
(裏面)

料金: 日本あて封書基本料金30F
書留料金45F
航空料金90F(10gまで)
合計165F

I 封書基本料金30F時期

フランスへの返送便
(航空便・書留)



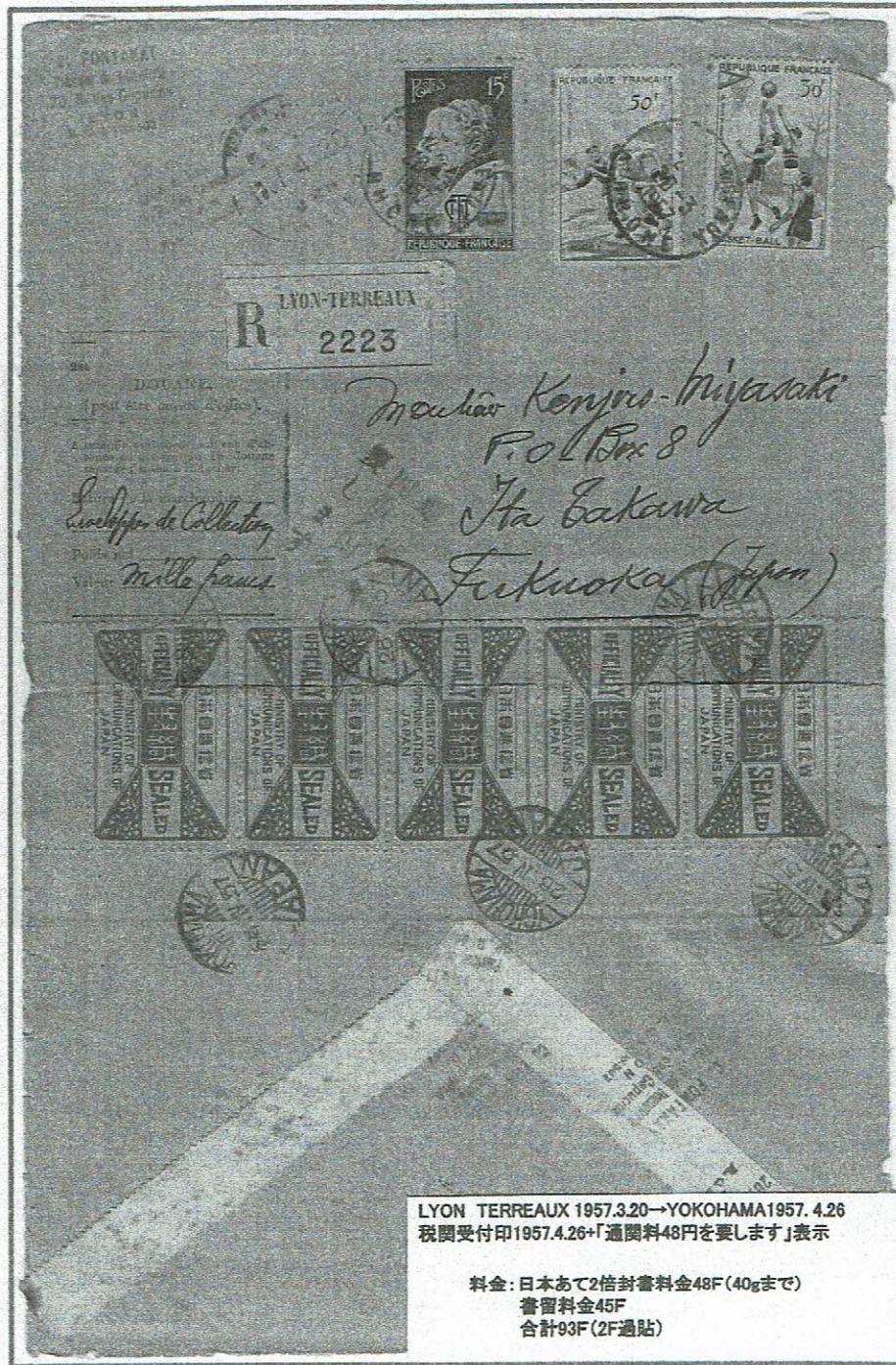
LYON TERREAUX 1956.11.22 + 税関(DOUANE)ラベル → HAKATA 1956.11.26(裏面)
→(返送) HAKATA 1956.21.2(裏面) → LYON TERREAUX 1957.1.18
博多局「通関料48円」表示、博多税關支署免稅印1956.11.2(正しくは「12.2.」)をペン書きで削除



(裏面)

料金: 日本あて封書基本料金30F
書留料金45F
航空料金90F(10gまで)
合計160F(5F不足)

付箋が外されているが、料金不足による受取拒否で返送されたと推定



II 封書基本料金35F時期

2倍重量平面便（船便）



LYON GARE 1958.7.26→門司鹿児島間(西回)昭和33年9月19日(→伊田局)

料金: 日本あて封書2倍料金55F
(55.5F貼付のため0.5F過貼)